

「火葬場にて」

火葬場の喫煙室。

A、タバコを吸っている。

A、歩いてくるBに気づくが、特に反応を示さない。

B、Aの隣まで来て、気怠そうに長椅子に腰掛ける。

B「あと一時間くらいだって。」

A「ああ。そうなんだ。」

B「たった。」

A「え？」

B「たった。……いや、短すぎない？」

A「そんなもんじゃない？3年くらい前に、じいちゃん死んだんだけど、その時もそんなくらいだったよ。」

B「あんまりだよ。」

A「ああ。そうかな。」

B「三十年だよ？三十年、共に生きてきた体だよ？たった一時間って。せめて丸二日は掛けて欲しい。丸二日は掛けて欲しいし、お骨の引き取りまでに、もう一週間は掛かって欲しい。」

A「そういう問題？」

B「そういう問題だよ。心の。喪に服すっていうかさ。」

A「やだから、それは骨を拾った後やるんだよ。初七日とか。四十九日とか、あるじゃん。」

B「そうじゃなくて、今。いま欲しいの。時間。死んで、死んだって連絡きて、さつき葬式終わって、もう？一時間だよ？短いよ、絶対。」

A「だから、そんなもんだって。」

B「ちよつと文句言ってくるわ。(ト、立ち上がる。)」

A、行こうとするBを無視する。

B、少し行った所で振り返る。

B「(苛立ったように、)いや、付いて来てよ。」

A「文句ないもん。」

B「手、抜かれてんだよ！？火葬の。」

A「考えすぎだって。」

B 「いいの!? あんなに仲良かったじゃん！」

A 「仲良かったって。最近、全然連絡してなかったじゃん。」

B 「そうだけど。・・・最後に会ったのいつだっけ。」

A 「五年くらい前だっけ。三人では。もっと前か。大学やっと卒業したつって、就職決まったつって連絡あった時だから。ほら、あいつの。町工場の。」

B 「ああ。そうか。やっぱアレかな。仕事辛かったのかな。」

A 「さう。」

B 「相談してくれりや良かったのに。」

A 「五年も連絡取ってない奴に出来る相談なんて無いだろ。」

B 「いや、こそだろ。連絡取って無かったからこそだろ。」

A 「お前、すごいな。」

B 「は？」

A 「いや、良くその温度でイけるな。つい先月飲みに行ったのに、とかならまだわかるけど。そんなに言うなら、もっと頻繁に連絡取ってあげれば良かったじゃん。」

B 「自分だってそうだろ。」

A 「だから、これくらいの温度じゃん。」

二人とも、バツが悪くなる。

B、タバコに火をつける。

A 「(ライターを探しているBを見て、) あれ、タバコ吸うっけ？」

B 「今日だけ。送り火。・・・死んじまったんだな。あいつ。灰になんだよ。タバコの先つちよと一緒。」

A 「なんつーかアレだね、君、年を重ねるごとに、白々しさが増すね。」

B 「・・・かっこいい。君。どんどんカッコ良くなってく。」

A 「(呆れたように、鼻で笑う。)」

B 「ねえ、やめない? こういうの。」

A 「なにが。」

B 「こういうの。」

A 「どういうの。」

B 「わかるでしょ、自分が一番。わざとじゃん。」

A 「だから何が。」

B 「ヤな感じにしないで。こういう日じゃなくない? 何なの、さっきからマジで。」

A 「(苛立った声を出すBに向けて、) 場所考えろって。」  
B 「どっちが場所考えてないんだよ。」  
A 「後で聞くから。」  
B 「カネ返せ。」  
A 「は？何だよ、突然。」  
B 「カネ返せよ。貸したの。」  
A 「(急に勢いを無くして、) だから、再来月返すよ。」  
B 「再来月？今返せ。」  
A 「うるさいなあ。返すってば。」  
B 「や、だから、今。」  
A 「金ないの分かってるだろ。頼むよ。」  
B 「何を？」  
A 「待ってよ。」  
B 「何を待つの。」  
A 「時間。」  
B 「ほら、求めてるじゃん、今。時間。」  
A 「は？」  
B 「そして、心。心、求めてるじゃん。いいんだよ。体焼く時間が、一時間だろうと、丸二日だろうと、再来年になろうと。いま言ってるのはさ、心の問題なんだよ。」  
A 「まだその話してんの。もういいよ。」  
B 「よくない。心は？どうなの。気持ち。貸した金の話だって、一緒だよ。いいんだよ、別に、再来月になったって、半年後になったって、三年後になったって、いやもう返ってこなくなつていいんだよ。心なんだよ、問題は。さつき、一時間じゃ短く無い？って聞いた時に、そんなもんじゃない？って言ったでしょ。最近、連絡くれれば良かったって言ったら、そんな、今まで連絡取ってなかった奴に出来る相談なんて無いって言ったろ。タバコの火を、送り火だってタバコ吸った時、白々しいって言ったろ。そんな時、心はあったのか。」  
A 「悪かったよ。」  
B 「悪かったよ？」  
A 「ごめんなさい。」  
B 「(B、どこか不服そうにしているが、) ごめん。」  
A 「……あいつさ、高杉にラインしたんだってさ。最後。死ぬ前。直前。」  
B 「高杉？なんで？仲良かったっけ。」

A 「言ってる、さっき。高杉。」

B 「ラインきたって?」

A 「うん。睡眠薬飲んで、その後。救急車呼んでくれて高杉に、住所と一緒に。でも、気付かなかったんだって高杉。そんな時、家でマンガ読んでたんだって。泣いてたよ、さっき。目、真っ赤にして。」

B 「そうなんだ。でも仕方ないだろ、それは。」

A 「あと、あいつさ、来週の歯医者予約入れてたんだって。」

B 「つら。」

A 「な。」

B 「つらすぎるだろ。(ト、涙を堪えられない。)」

A 「な。」

そこに、Cが歩いてくる。

A、B、立ち上がる。

C 「本日は、有難うございました。」

A 「ご愁傷様でした。」

C 「兄も喜んでいと思います。」

B 「いえ、こちらこそ。あ、いや、こちらこそって、喜んでるってわけじゃない。く。」

A 「分かるよ。」

C 「ええ、分かりますよ。有難うございます。」

B 「すみません。」

A 「そろそろですか?」

C 「はい。お願いします。」

A、B、行こうかと立ち上がる。

C 「兄って、どんな人だったんですか?」

A 「え?」

C 「どんな人だったんですか?あの人。あまり知らないんです、私。あの人、家にいる時間が少なかったの。」

B 「あゝ。えっと、あの!赤ちゃんの物真似するのが上手かったんですよ。休み時間とかに、仲良い子達で集まって、誰が一番、将来有望な赤ちゃんっぽいかを競って。ベイビーちゃん祭りって呼んでたんですけど。」

A 「いや、マジでホントやめて今は。頭おかしいんじゃないの。マジで。」

B 「いや、マジですマジです。いや、学校で保険体育の授業があつて、それで、授業の中で、赤ちゃんの気持ちを想像して言葉にしてみようって時間があつて、グループになって、赤ちゃんの気持ちを代弁したんですよ。それで、その教師っていうのが、元保育士で保育園で働いてたんですけど、その教師が、赤ちゃんのことを『ベイビーちゃん』って呼ぶ人で、そこでその授業の後半であいつに『あなたは、今まで私が見てきた生徒の中で、一番ベイビーちゃんの気持ちに分かつてる、だから全員の前でお手本でやりなさい』って言って。あの子、みんなの前でやっただんですよ。はい。マジそんなくらい上手かったですよ。」

C 「一番の思い出がベイビーちゃん祭り。」

B 「いや！一番のってワケじゃないですけど、今たまたま思い出したのがそれだったというわけです。てかでも、マジで只者のベイビーちゃん祭りじゃないっていうか、マジで誰も敵わないってか、百戦錬磨だったんですよ。だって、元保育士が褒めたんですから。元保育士が選んだ、延べ何千人のベイビーちゃん祭りの中でも目を引く、なんつーか選ばれしベイビーちゃん祭りだったんですよ。」

A 「ベイビーちゃん祭りは、お前らにしか伝わらないから。」

B 「え、知らない？」

A 「知らないよ。」

B 「（ベイビーちゃん祭りをやって見せる。）え、うそでしょ。あんなに流行ってたのに？ワンピースより流行ってたよ？」

A 「だから何なの？」

A 「や、だからだから、なんつーか、あいつは、本当に赤ちゃんの気持ちを理解する能力に長けてたんですよ。てか、もうなんていうか、爆笑の渦で。いや、いい意味で。まあ、はい。そんな感じっす。」

C 「へえ。知らなかった。・・・高杉さん、でしたっけ、あの男性。兄は、あの方のことが好きだったんですか？その、性的に。」

A 「え？えつと、どういう意味ですか？」

C 「いえ、そのままの意味です。兄、ホモだったんですか？・・・あ、いえ、ごめんなさい。何年か前、なんの風の吹き回しか、家族四人で映画館に行ったんですよ。父と母と、あの人と私と、四人で。その映画、流行りのラブロマンスで、オシヤレだつて触れ込みで、珍しくあの人『せっかくだから久々にみんなで映画でも観に行かないか』って言い出して。まあ、いいか暇だしって、四人で観に行つて。したらそれ、ホモの映画で。男同士でセックスとかしちゃつて。それでその後、入った近所の中華料理屋で、何となく感想とか言

い合ったんですよ、気色が悪かったねとか、ハズレだったねとか。その時にあの人も一緒になつて、あはは、ごめんね、失敗だったねって笑つてたんですけど、横目で……顔みたら、口の上の、ここんところ（ト、唇の上をさして、）ピクピク動かしてて。それで、そうなのかなって。もしそうだったのなら、悪いことしたなつて、ずっと、こう、何て言うか、胸のつかえつて言うか、あつて、ずっと、ここに。それで、どうなのかなつて。……あ、ご存知ないですか？」

A 「いや、ごめんなさい、分かんないや。」

B 「えー？ そうだったのかなあ……。どうなんだろう。え、マジで？ うん、どうなんだろうなあ。ああ、でも言われてみれば？」

C 「……。なあんだ。」

A 「残念なんですか？」

C 「残念ですよ。」

A 「なんで？」

C 「考えなきやダメじゃ無いですか、また一から。あの人、なんで自殺したのか。ホモだったのが自殺した理由だったのなら、これからの人生で、私たちが何に後悔すればいいか分かるじゃないですか。……。あ、行きましようか。」

B 「あ、はい。（まだ座つてるAに、）ほい（行くぞ）。」

A 「……。いいわ。」

B 「いいわ？ とは。」

A 「行かない。」

B 「は？ 何で。」

A 「ちよつとアレだわ、行きたくなくなつたわ。」

B 「は？ もうさ。いや、子供じゃ無いんだから。ほら、行くぞつて。」

A 「いいいいわ。マジで。行ってきて。頼むわ。」

B 「わかつたよ。行きましょ。（ト、Cに。）」

B、C、出て行く。

A、一人残される。

タバコに火を付ける。

軽く吸つて、後は先っぽの灰を見ている。

了